

保育における表現の問題 「表現活動：音楽」の実践を通して

竹村 壽美子

(平成18年12月6日受理 最終原稿平成19年1月9日受理)

これまで、保育現場の「表現活動：音楽」に関して、保育者と何度も話し合う機会を持った。幼稚園教育要領や保育所保育指針が改訂されて、すでに10年近くも経過しているものの、表現活動においては、いまだ保護者側の“見栄え”の要求と、それを“意識して”指導しようとする保育者の姿勢がある。こうして本来子どもの自発的活動に根ざすべき「表現活動：音楽」が保護者に見せる為の表現活動になりがちな指導傾向のなかで、行事としての保育展開に苦勞している保育者の現実がある。一方日々の保育のなかで、子どもの内面からあふれる表現を、受容し、認め、共感し続け、何とかしてこのような表現活動を、行事や保育参観の場で、保護者などに伝えようとする努力も見られ、除々に改善されていく傾向もまた見受けられる。

子どもが歌を歌う、楽器を演奏する、音に合わせて身体を動かすなど、目に見える形での表現を、「表現活動：音楽」は追求する。けれども子どもは突然歌を歌ったり、楽器を鳴らしたり、楽しそうに身体を動かせたりするわけでもない。このような表現が現れる前に子どもの内面に何か起っているはずである。内面にあるイメージや感情が、ある時、外界からの働きかけを通して自分の外側に向かって具体的な形をとって現れる。子どもの内面と外界とのかわりを、表現の世界へと誘う役割を担う保育者は、どのような保育内容の創造を子どもと共にすすめていかなければならないか。日々子どもが歌を歌ったり、楽器を奏でたり、身体で表したりすることは、子どもの内面の育ちとどのような関係があるのだろうか。子どもをとりまく外界つまり環境が様々な表現の世界にどうつながるのだろうか。「表現活動：音楽」の実践と課題を探るところから、「保育における表現の問題」を検討しようと思う。

キーワード：歌う、奏でる、リズムによる身体表現、総合的保育、表現的保育者

1 総合的な保育と「表現活動：音楽」

表現を育む基本姿勢

イ．表現を探るまえに

子どもの内面にあるイメージや、感情が、ある時外界からの働きかけを通して、自分の外側に向かって具体的な形として現れる。この様な場面に出くわした時、保育者は保育に携わっているこの一瞬に感動を覚える。

40年近く保育者としての立場で、子どもの生活に即し、流れに寄り添い、自ら子どもとの関係を築きながら、実践者の一人として生活していた日々を振り返ってみたい。時を越えて懐か

竹 村 壽美子

しい保育の世界を呼び起こすことで、保育における表現の問題が多少なりとも具体的になればと思う。ここで原点に立ち返ってみることにしよう。

『表現原論 「幼児のあらし」と領域「表現」』において、大場牧夫は冒頭に、「教育要領の領域『表現』の所だけを解釈し、理解したつもりになり、手を打ってあげばいいのだろうか。いったいどういう人間を育てることなのか、という基礎からしっかりと考えていき、その中で人間としての子どものあらしの部分ということ、表現ということはどういうふうに大事な発達の側面として見ていくか、その為には他の側面との絡み合いの中で子どもの受容と表現という力を、人間の大事な部分として育てていくことがこれからの私たちがやらなきゃならないことなのだ。」¹⁾と論じている。大場は30余年に及ぶ幼稚園教諭としての立場から、終生「表現」の問題に関心を持ち続けた。彼は実践者の視点に立って、子どもの人や物とのかかわりを育てる保育の構造を考えた。

私は保育者として過していた日々、何度か大場の師事を受け著書を読み、その度に共感し原点に立ち返ることが出来た。

ロ．いったいどういう人間に育てるのか！ということ

保育現場での教育目標・保育目標から考えてみることにしよう。幼稚園では幼稚園教育の基本に基づいて展開される幼稚園生活を通して、生きる力の基礎を育成すること、保育所においては、現在を最もよく生き、望ましい未来をつくり出す力の基礎を培うことと、それぞれの教育要領・保育指針にうたわれている。これらをふまえて、各幼稚園・保育所においては、具体的な望ましい子ども像として、子ども・保育者・保護者に最も理解しやすい内容で、おおむね次のように定めている。

- ・心身ともに健康で安全な生活の為の基本的な生活習慣・態度を培う。
- ・人とのかかわりの中で、愛情や信頼感を育て、自主・協調・道徳性の芽生えを培う。
- ・様々な体験を通して豊かな感性・創造性の芽生えを培うこと。

大場のいう「どういう人間に育てるのか」という指摘は、こういった基本目標につながる問題だと考えられる。保育現場の忙しさについ流され勝ちな日々ではあるが、保育者は常に保育の場面を振り返り、点検を怠らない保育姿勢が求められる。その上に立って表現の側面を理解していく、そんな努力が必要となってくるのではないだろうか。

ハ．子どもの表現をどう見るか

大場は「表現」という言葉を「あらし」と言い換え、子どものあらし手とうけ手に関して次のように述べている。

「あらしというのはいろいろな形を取って、何も派手に何かをやったり、物を書いたり歌ったり動いたりすることばかりではない。その時には、必ず受け手がどう受けとめるかということが非常に大事な問題になってくる。子どもはそういうことを計算していないけれど、その受け手によって関係はきちんと成り立ってくる」と。また著書の中では、「ある人はすべて

保育における表現の問題

のものを表現として見ていこう。いやだというものも表現として見ていこう。何もしゃべらないものも表現として見ていこう。受け手を全く考えないで無頓着に子どもがあらわしている状態を表出、あるいは表出的状態という言葉を使っている。この表出的状態は保育の中では、数えればきりのない程の子どものしぐさで散りばめられている。そして、受け手こそが保育の中では保育者であると言える。重要な役割であらわし手と受け手の問題がここにクローズアップされてくる」²⁾と記している。

保育実践事例

月曜日の誕生会のこと。担当の保育士は誕生児を前に並べて、「昨日の日曜日はどんなことをしたの?」と聞く。よくある例である。順番が回ってきて3歳児のT夫は「ボクはきのう……」とまで言い出して次の言葉が続かなかった。でも表情は明るく弾んでいて何か伝えたそうである。突然頭をペコンと下げ「とりに行って来た」と嬉しそうに言う。その時T夫は頭をペコンと下げているのである。「うつむいてはわからないよ、何取りに行ってきたの」と担任が迫る。保育者の無神経な言葉がT夫には悲しかった。弾んでいたT夫はいっぺんに白けてしまった。取り繕うすべもないところ、急に5歳児のY君が「一緒にわらびを取りに行ってきた!」と叫んだ。T夫とYは山で次々生えているわらびの格好をしてまねて、楽しんで来たことがその後すぐに理解できた。わらびを全身で表出しようとしたT夫が印象深く心に残る。又このような場面で、このような言葉しか持ち合わせていない保育士にも問題を感じた。他に方法はなかったのだろうか。

保育実践事例

言葉の発達に問題のあるKが、おでこに大きなたんこぶを作って泣きながら訴えた。「痛かったね 痛かったね」と言いながら手当をし、「どこでこるんだの」と保育者は聞いた。Kは泣きながら両手を広げて何回も大きく回転させた。「??」と戸惑っている一瞬の間、Kの一番の友だちAが、「先生! プールの角で打ったのや!」と、さも保育者をあきれさせるような眼でどなった。言葉のまだまだ発せないKが、質問にせめてもの表現で答えたことを理解出来ない自分が、保育者がそこに居た。Aのほうがはるかにあらわし手であるKの受け手といえる。

二つの事例から津守真の『子どもの世界をどうみるのか』によって表現と理解について検討を加えていきたいと思う。津守は、「子どもはその世界を遊びの行為に表現するが、それは子どもが無意識の中で行う創造的作品ともいえる。大人はその表現を手がかりにして、子どもの世界を理解する。子どもは自分自身の心の願いを自分でも十分に理解していない。大人が理解する事によって子どもは次の段階へと心的発展をする」³⁾と言う。わらびを取りに行ったT夫とYは、遊びの中でわらびになって表現していたに違いない。あの小さな「わらび」の芽を身体全身で受けとめ、形に表している彼らの感動が伝わってくる。頭を垂れて「わらび」を演じ

竹 村 壽美子

る姿に、山の中で喜々として遊び続けた彼らの、満たされた想いを読みとってやりたい。

子どもは1日の保育を経るうちに、自分自身の心を、願いを、創造的に表現出来たとき、その日を特別に満ち足りた日と感じるだろう。朝子どもと出会った時には、どのように子どもにとって意味ある遊び（表現）が展開されるのか予想出来ない。展開する現在を保育者が明るく力づけることによって、思いがけない未来を子ども自身が形成する。子どもの世界の表現である現在の行為をよく見て、その現在に応答することにより、子どもと大人の合力による新たな現在が形成される。保育は未来のためにあるのではなく、過去を適用するものでもない、保育とは現在を受容し、現在を形成する力である。

総合的保育と「表現活動・音楽」

冒頭に表現を子どもの発達側の側面としてどの様に見ていくか、その為には他の側面との絡み合いの中で、子どもの受容と表現という力を大事な部分として育てていくことが、これからの私たちのやらなければならないことだと述べた。大場はかつて、「幼児期の表現について楽しく歌を歌う為には、頭の中にイメージが豊かに膨らんでいるとか、楽しい豊かな表現がされる場合には、その子どもの生活経験が非常に豊かであり、しかも感動的であるようなことが、子どもの内面にたくさん蓄えられているからこそ、すばらしい表現になって表れてくるというような発想をする指導者が非常に少ない」⁴⁾と述べている。総合性というものが欠けてしまっていると言、「子どもは単純に歌を歌っているわけではなく、もっと様々な経験が膨らんで混ざり合って総合的に体験されており、幼児期にはこの総合性こそが大事な部分として捉えていかなければならない」⁵⁾としている。幼児期においては、様々な内容が絡みあって表出される。ここに表現を総合的にとらえる必要がある。気持ちよくみんなで一緒に歌を歌うということは、子どもの心と身体の状態もかかわっている事だし、子ども同士のかかわり、つまり人間関係の側面、みんなと一緒にいるという実感、こういうものが伴ってくるわけで、みんなと楽しく歌を歌うということをめぐっても、ただ「表現」の音楽の問題だけではないというように捉えるべきなのである。これを総合性の視点として理解するように保育者は考えるべきだと思う。「保育者はともすれば楽器を鳴らしていると、音楽的表現をしていると見なしたり、歌うことも、リズムカルに身体を動かしていることも、同様に思ったりする。しかし、目に見える形で展開する、歌うことや、楽器を鳴らすこと、又はリズムに合わせて身体を動かすことの土台こそが、子どもの内面に育っていると感じると感性が大切である。その土台を育てるのは、保育の場でその時々活動を保障するものとして、『総合的な保育』が展開されてこそ可能なのである。その時の活動が生きてくる。これは外界からの働きかけが内的な世界（イメージ・感情・情動）をゆさぶり、具体的な形となって表現されることである。」⁶⁾と示している。

保育実践事例

水槽で泳ぐ金魚を見て、金魚の家族をイメージしたKは、金魚のなかよしの家族を自分の家族とオーバーラップさせているのか、心の中に温かい感情が溢れている様子である。

保育における表現の問題

そこで楽しげな音（音楽）を探しリズム打ちを始める。と同時に金魚の泳ぐ様を身体で表現しようとする。その元気のいいリズム感や嬉し気な表現は子どもの内面とつながって、生き生きとしているのが理解できる。物音・色といった自然のものと、子どもと保育者の中間にある表現手段は、保育者の工夫によって巧みにより豊かな表現へ誘うことがある。

総合表現の楽しみとして

「今まではあまりにも子どものいろいろな活動がばらばらに行われてきたと思う。音楽は音楽、絵本を見るときは絵本を見る、歌を歌うときは歌、音楽表現の中でも歌うときと合奏は別のもの、身体表現も別という具合に保育は進められてきた。しかし、子どもの生活の中から漏れてくる歌に耳を澄ますとき、それは嬉しげなごっこ遊びの中から漏れてくる。保育者の意図の中では、中心となる活動はたとえ歌うことであっても、子どもは周りのことを融合させ、知らず知らずに身体を動かせるリズムに進み、友だちとの関係づくりにまで、音楽的な感性を働かせながら、イメージの世界を広げていくことが出来る。」⁷⁾と大場は記している。

このように子どもが至る所に総合表現をやっている場面を保育の現状の中で、私たち大人はもっと感じていく必要があると思う。決して「音楽活動・音楽」はひとつの輪切りの中の領域ではないと理解した上で、保育者は子どもの表現を自らの表現の可能性として受け取り、そこで理解された意味を自分と他人に共通のことばあるいは、伝達可能な行為に移すことである。子どもの表現が行為による表現であるように、保育者自らの理解をまず行為によって表現し子どもに伝える。子ども側から言うならば、大人の保育行為は大人の理解の仕方を表現しているのである。

保育実践事例

「かさじぞう」を音楽劇に表現

5歳児15名でかさじぞうをミュージカルへと誘った。保育者の意図としての計らいであった。来るべき生活発表会への格好の活動と決めた。子どもたちはストーリーにも馴染み、物語の展開をどんどん進めて、内なるイメージ・思いや願いが溢れ出て指導者を満足させていた。日が進むにつれ、形にまとめたいという保育者自身の虫が騒ぎ出した。物語の前半は子どもの表現も個々の特徴も、自由に表れていた。後半の物語展開の中で、おじぞうさんの登場には、こらえきれずに指示型になった。子どもの表情は一瞬にして固くなり、感情も微動だに表れなくなり顔つきは変わってしまった。

性懲りもなくそのまま表現活動を繰り返し、訓練的な練習に進めていったものの回を重ねる度に以前の快活さ、明るさは消え失せてしまった。2日後に発表会とせつば詰まった日、保育者は近くの野原へ散歩に出かけた。田舎道にたたずむおじぞうさんを見てまわった。子どもたちは喜々として「笑ってる」「怒ってる」「手が上に向いている」「いや下向いてるおじぞうさんもいる」など、何体も見て回った。その様子を確かめ合った。さて、発表会当日保育者は子どもたちに伝えた。「きのう見てきたようなおじぞうさんでやって

竹 村 壽美子

みよう！」はたして、当日の子どもの表現は表情にあふれ、生き生きとリズムカルなミュージカルとして実現した。クライマックスでおじぞうさんが、お爺さんの家へ俵を運ぶシーンは、俵を担ぐ表現、地面をすべらす表現、二人で担ぐなど、めいめいの運びの表現をしながらも、動きは統一的な美しさを保ち、そのリズムはクラス全体にまで影響し、観客の拍手を一杯うけた。一步間違えれば通りいっぺんの表現発表に終わったところが、保育者の配慮で一変したのである。

表現活動の指導と保育者の資質

自己の内面の世界を外の世界へ表出する。その始まりは、表現する子どもの心の動きであり、感じた事思った事であると考えたとき、保育の場で気をつけなければいけないことがある。子どもの表現を促すことはあっても、それを強いることは好ましくない。又表現の方法に示唆を与えることはあっても、指示することは好ましくない。どちらの場合も子どもの意志にそぐわない、表現めいた行為にすぎなくなってしまう。表現の手段や分野の違いがよく問題になる、分野に固執し、専門的な質の高さを求めると、どうしても子どもたちの気持ちから切り離された指導になりがちだからである。結果が重視され、そこに至るまでの子どもの気持ちに配慮が行き届かない。子どもたちの表そうとする中身ではなく、技巧的な表現を求めようとする意図が先に立ってしまう。

「私たちは多様な表現の方法をもっている。どの様なものでも、表現の手段にすることができる。子どもたちも自身の身体で表し、手元のものを仲立ちとして表す、その表わされる思いを、しっかりと受けとめてやらなければならない。その思いの中に育ちを読みとり、その思いの豊かな育ちを願って子どもたちの表現を育てていきたい。それは表現に至るまでの過程を大切にすることであり、表現の土壌を育てようとすることである。」⁸⁾黒川健一はこう述べている。

音楽的環境について

表現は自分の心の中の世界を、外の世界におきかえてみる営みで、心の中の世界はかかわる環境によっても作られていく。言い換えれば環境とかかわる中で、心の中の世界が作られていく。周囲の事物、事象との触れあいが、子どもの心を動かし、子どもたちに様々なことを感じさせ、考えさせる。このように表現の発端にかかわって作用するような環境がまず考慮されねばならない。次に子どもの表現に応答する環境が大切である。子どもの表現は周囲の人に受けとめられることによって生きてくる。相手の共感や理解があって初めて自分の表現を、自分の育ちへとつなげることが出来る。保育者は子どもたちの表現の受け手という環境になることが、先ず大事である。さらに保育の場における表現的な文化の問題がある。子どもたちの表現につながる文化財、周囲に日常的に準備されている環境、マイク・ピアノ・楽器などが応答の対象となる。子どもは周囲の事物を仲立ちにして、自分の気持ちを表す。すぐ手近な所に表現の遊具があればそれを使って、そこから表現的な活動を始めるはずである。

保育における表現の問題

日常生活と表現を考えてみると、私たちの社会は情報化社会と呼ばれている。情報が豊かに流れ合い、多量の情報によって成り立っている。表現の環境としてまず思い浮かぶのはテレビである。テレビはすっかり私たちの日常生活の構成要素となってしまうている。テレビの特性としては、音声と映像の両方を媒体とした様々な表現を家庭に一律に持ち込んだことである。そしてこのことは子どもたちを取り囲み、子どもたちの幼児向けの様々な番組が放映される日常を生んだ。ここで大切なのは、便利で豊富な表現的環境ではなく、それらとの豊かなかわりである。表現する主体との直接のやりとりである。与えられた表現を受けとめ理解する態度や能力も重要な問題である。しかしもっと大切なのは、それに呼応する子ども自身の表現の創造である。子どもたちが五感の全てを働かせて感受し、考え、全身で表わすような、表現的環境、その基本は人との触れあいであろう。豊かな表し手、豊かな受け手として保育者自身が先ず、豊かな表現的環境であってやりたいと思う。

幼稚園教育要領解説「表現」において特に留意したい事項

イ．分割されない幼児表現論

領域「表現」のねらいの中には、「様々な方法」あるいは、「様々な表現」という、言葉が使われているが、幼児というものは、もともと様々なものが、様々なに混ざり合って、表現しようとしていると思われる。しかし今まで、現実にはまだ尚、従来からの、「絵画製作」「音楽リズム」など、それぞれの分野の指導・研究の枠が根底に定着している。これらを解きほぐし、幼児の表現の本質論から、あるいは総合的な表現論から考えていくことが必要である。本来の子どもの様々な表現、様々な方法を自由に引き出してくる分野として、「表現」という領域を考えていくべきである⁹⁾。

ロ．領域の「表現」の観点とねらい

幼稚園教育要領解説では、「表現」感性と表現に関する領域について「平成元年の改訂で『絵画製作』『音楽リズム』の領域がなくなり、新しい領域名称『表現』となった。従来の二つの領域は、保育の主たる内容となっていた傾向にあるので、この改訂においても戸惑いが生じた。保育現場や養成機関など、絵画製作・音楽リズムの扱い方は、どちらかということ、大人が要求し、指導し、与えていく、感覚と技能の指導の世界、このような内容や方法が中心になりすぎていたのではという反省もあった。この領域の活動は、最終的には、親に見せ、指導の効果を明快に示す分野として利用されていることが多く、子どもが自発的に活動し、表現する楽しさ・喜びというものを大事にしていけないのではという反省もあつた。教育要領では、これらの意味を含めた分野として『表現 - 感性と表現に関する領域』となっている。この領域の大きなねらいは次のように3点あげられる。

- ・ いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。
- ・ 感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。
- ・ 生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。」¹⁰⁾と示されている。

竹 村 壽美子

2 表現的保育者への手がかりとして

うたう

「表現活動；音楽」の第一歩は歌うことから。子どもが生まれてはじめて体験する音楽は歌うこと。母親と共に歌い、先生と友達と歌い、一人の声を複数の声の中で無意識に心地よく共鳴させる体験が、どれだけ子どもの多面的な発達にとって大切なものであるかは、言うまでもない。「歌うこと」について保育実践を例に考えていこうと思う。

イ．うたはともだち

日常の大人と子どものかわりには、「話」が中心でその話し方もモノトーンなことが多い。話かけても話かけられたように感じないという事態がよくある。しかし、大人が話そうとすることを歌いながら伝えるとたちまち子どもは反応する。

ゆりちゃん は あ い あ そ ぼ は あ い い ま い く よ
♪ ♪ ♫ ♪ ♫ ♫ ♪ ♫ ♫ ♪ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫ ♫

例えば「ゆりちゃん」「はい」「あそぼ」「はい」「いまいくよ」を、上のような形でかかってみると♪♪(三つうち)の基本リズムも同時に体得でき、問答唱に発展することもある。このことは親と子のあいだでも日常的に無意識に行われていることが多い。子どもが何か痛い目にあった時はどうだろうか、「痛い、痛い、飛んでゆけ」と、メロディーやリズムで歌ってあげると、泣いていた子どもはふと落ち着く。子どもの日々は、「歌」という「ともだち」で大人も友達もなめらかになっていく。歌っていると子どもの日常は生き生きしてくる。音程やリズムをきちんととれなくても、それでも歌うことに、歌ってもらうことに、よろこびを感じ心の底から歌いだす。歌う機会を多くしていくと、そのうちしっかりしたメロディーも出来てくる。

ロ．うたは模唱で

子どもはどの子も先生が大好き。先生の一挙一動のすべてをよく見て真似をする。歌もそうである。先生が一節ずつ歌って、あとを真似して歌うようにとすると(模唱) 子どもたちは先生と同じ口の大きさで、同じリズムで、同じ音程で歌う。先生がピアノの前でいくら上手に曲を弾き「もっと元気に」とか、「もう少し小さく」と言っても、子どもはその尺度がわからない。だから大声でどなったり、反対に力のない細々とした声になってしまう。「模唱」は、「範唱」ではないので素晴らしい発声でなくても、ごく自然な声で歌うことが大事である。ただ、ゆっくりと、はっきりと、ていねいをモットーに。

- ・「ゆっくり」はテンポの問題。テンポを落としてゆっくり歌わないと、言語不明瞭で発音が不正確になりがちである。速い曲で生き生きしたリズムでも、はじめはゆっくり発音するように。

保育における表現の問題

- ・「はっきり」は言葉の問題。音節（音をどこで切ったり伸ばしたりする）で音楽内容が変ってくる。あくまではっきりとした発音と区切りが必要。
- ・「ていねい」も言葉の問題。雑にならないように、いい加減に歌ってしまわないようにという意味である。いくら素敵な歌でもいい加減に歌っては何にも伝わらない。そして最後に先生と一緒にうまく歌が歌えるようになってから、きちんとした伴奏が入るのが理想的である。

シュタイナー音楽園の吉良創は「幼児と接する体験の中で、興味深いことに気づいた。それは、言葉では表現しにくい、ある歌を子どもと歌っている時、その歌をどのように覚えたかによって、歌い方が違うということ。お母さんや教師や、誰かまわりにいる人が歌っているのを聴いて、まねして歌うようになった歌と、CDやテレビなどで、スピーカーから再生される歌では、子どもの歌い方が違う。後者の場合はどなったり、歌う時に力が入ったりする傾向が強く見られるのに対し、前者の場合は、遊んでいる時に無意識に口ずさんでいるのと同じような、質をもった軽い歌い方である。」¹¹⁾と語っている。

八．「手遊びうた」ってなあに

「両手を出して手をじっと見つめてみる。長さのちがう5本の指が順序よく並んでいる。握ってみる、動かしてみる、ひらいてみる、指を折り曲げしてみる、両手を重ねて合わせてみる、ものをつまんでみる。よく見ると一つひとつの動作を変えるたびに、手の、指の、ようすに豊かな表現がある。どの指をみても、それぞれ独自の働きがあり、表情がある。子どもたちのあいだでは、5本の指を一つの家族にたとえて、お父さん指、お母さん指、お兄さん指、お姉さん指、赤ちゃん指、というように呼んで親しく指を動かさせている。指は手のひらの先に並んでいて、手は腕に続いている。その腕は肩につづき、すべていっしょに動いている。これらの動きをメロディーやリズムに合わせて動かして遊ぶのが手遊びうたである。」¹²⁾

たのしければ、おのずから声が出て身体は動き出す。手も足も腰も動き出す。子どもにとってメロディーやリズムは遊びのひとつ、いわば生活である。たのしく手が動き、その手で犬の形をつくり、自分が犬になってみて、友だち、保育者、親たちと心を通わせる。

分類として

- ・表現的なあそび

動物や、人や、ものの動きを模倣したり、うたの内容に自分を投影する

例 まねっこ いちといちで何つくろう ころころたまご 小さな畑を耕して

- ・なまえあそび

指や身体の名称、大小、数の概念を深めるあそび

例 10人の小人 かなづちトントントン 奈良の大仏さん ゆびのねんね

竹 村 壽美子

・じゃんけんあそび

勝負のほか、グー、チョキ、パーをつかってあそぶ

例 グーチョキパーで何つくろう げんきげんき みそラーメン

・リズムあそび

リズムの複雑なあそびを間違えないようにたのしむ

例 はじまるよったらはじまるよ 一丁目のどらねこ おべんとうばこ

・うんどうあそび

手を中心にしたあそびを展開させた体操や運動をたのしむ

例 あじのひらき ビクニックへ行こう どんぐりやまのはちべえさん

手あそびうたの使い方

- ・いつでも出来る ・どこでも出来る ・だれでも出来る
- ・特別な道具を使わない ・肌のふれあいがある ・社会性を養うことが出来る
- ・音楽感を養うことが出来る ・集中力を養い高めることが出来る
- ・運動あそび、楽器あそび、想像あそびに展開できる
- ・ことばのおもしろさ、数の概念、抽象事項などの理解ができる。

手あそびうたの指導者の心がまえ

- ・子どもの目の高さで ・あそびのポイント（盛り上がり）をつかんで
- ・時、場所、状態、をよく把握して ・歌詞、動作、テンポなど子どもの発達をみて
- ・子どもの自発的な活動を促し発達をはかるように ・見える位置で
- ・あきないうちにやめる ・押し付けない

二．わらべうたランドに想うこと

昔の人たちから受け継いできた、目に見えない文化財とでもいうべき“わらべうた”に、たくさんのお宝ものがかくされている。わらべうたを歌って遊んでいると、不思議な一体感が仲間同士の間でうまれてくる。短いフレーズであるわらべうたの一曲に、子ども達の遊びの知恵が結集されていて、その遊びが機能的に進められ、むだのない言葉のエッセンスがいっぱい詰まっている。

また、わらべうたは、日本の音階である5つの音（ペンタトニック）によって歌われ、いちど聴くと忘れられなく心に残る音の構成になっている。音程の不安定な、音域の狭い子どもたちにとって、この数少ない構成音で出来ているわらべうたを、仲間と歌いながら楽しく遊ぶことによって、自然の中で正しい音階が身につき、自ら心地よく歌う心が芽えてくる。また幼児の音楽教育にとって最も大切である「拍感」が身についてくる。安定した拍を感じながら遊ぶことは、音楽的だけでなく子どもの人格形成の上でも必要なことといえる。

わらべうたによる遊びは、仲間たちと声を響かせ、手を合わせる心地よさを自然のうちに楽しく体験しながらくりひろげられる。子ども同士の協調性や集中力を養うだけでなく、遊びのなかで社会性が育っていく。

保育における表現の問題

・大和のわらべうたランドの実践から

(奈良の公立保育所で、「わらべうたランド」と名付け、昔から伝わっている「大和のわらべうた」を、集団保育の中に組み込み、継続的に体験させた。)

毎年4月に初めて保育所に入所してくる子どもたちは、環境に馴染みにくい日が続く。この時期、わらべうたランドは、無理なくあそびに入ることが出来、友だちづくりもスムーズにできる。その後も年間計画に折りこみ実践する。

・その内容

身振り遊び歌(弁慶が、鯉の滝のぼり、いもむしごろごろ、なかなかほい、他)

手遊び歌(お寺の花子さん、れんげ摘もか、林のなかから、うちの姉さん、他)

鬼遊び歌(こんこんさん、奈良の大仏さん、梅か桜か、かごめかごめ、他)

外遊び歌(口ウソクの芯まき、おせおせごんぼ、はないちもんめ、おしくら饅頭、他)

縄跳び歌(一羽のからす、俵のねずみ、郵便さん、くまさんくまさん、大波小波、他)

歳時歌(大寒小寒、マッチ一本、亥の子の晩に、豆狸、正月きたら、奈良の子、他)

奏でる

耳を澄ませば聞こえてくる……

乳児の聴覚は非常に繊細である。泣いた時に鈴を振る。子どもが鈴の音を知覚すると、大人よりはるかに親密に、その音と結びつき反応する。心を動かさ表情を変え、泣き止む。保育現場でこんな光景に何度も出会った。大人は音を聞き流すことができるが、子どもは音が耳から入ると頭の先から、つま先にまで浸透し、それらを動かす。音に対するこの繊細さは、年齢を追う毎に失われていく。これは自然の成りゆきかもしれないが、文明生活の影響で加算されているとも思われる。保育者は子どもの聴覚を守ることに努力したい。保育者自身が聴き入り耳をそばだてることで、子ども達の手本ともなり、子どもの聴覚を育てていくことに繋がるのではないだろうか。奏でる保育は、まず「音」との出会いから、「音」そのものを発見し、「音」を作り出し、「楽器」とともだちになり、子どもアンサンブルにつなげてみよう。

イ. いろんな音がきこえてくるよ

保育室でじっとして目を閉じる。耳がだんだん大きくなっていくようで、いろんな音が聴こえてくる。「だれかの足音だ」、「車の走る音だ」、「先生の動く音だ」と普段キャッチしない音を聞き取ることが出来る。好奇心は「目＝視覚」になりがちな日々、時には目を閉じて「耳＝聴覚」に向けてみるのが大事。そこには新鮮な空間がひろがっていく。しばらくの後、どんな音が聴こえたかみんなで発表しあうようにする。

(注)3歳ごろまでは、いきなり一斉に静かにしておこなうのではなく、お昼寝のときなど一人ひとりに声をかけてみるなり、「あれ！今何か聴こえたね」など子どもに問い返す方法がよい。4歳になればみんなで静かにできるようになる。最初のうちは、くすくす笑ったり、ごそごそ動いたりするが、回を重ねるとだんだん「音」を見つける、聞き分けるのが楽しく

竹 村 壽美子

なってくる。なかには今聴こえていない「心の音」や、「想像の音」、「思い出の音」に及ぶこともある。それも受け入れること。

ロ．音探しにいこう

保育室から外に出て広い世界の音をさがそう。面白い音、不思議な音、好きな音、そして見つけた音はどんな音。たくさん探しに出かけたあとはどんな音が見つかったか、みんなの前で発表しよう。自分が思いもつかない音に他の誰かが気づいている。

(注)「身近にあるさまざまな現象から音は聴こえてくる。それを聞き分ける、とぎすまされた聴覚は、自分の周囲を360度網羅し、身の危険を守るための高度な能力にもつながる。外は自然の音にあふれている。自分を囲むたくさんのもに感覚をとぎすませ、認識を新たなものになるよう導いていく。自由に探してきたあとは、必ず「見つけてきた音」を発表させるようにする。自分の感性で見つけ、自分の感性を信じ、人前で発表することは表現する第一歩になる。」¹³⁾

現代の都会にあっては、人間の出す生活音のあまりもの多さに、この感覚が無意識に閉ざされていることがある。保育者が「静けさ」を意識し、耳を「解放」し、音を素直にうけとめる瞬間を作ってみよう。

ハ．手作り楽器の応用

身の回りのもので作る手作り楽器。ただ作るだけでなく「こんな音がいい」という気持ちで、自分で選んで作ることがたのしさを一層増す。特に打楽器は音のでる構造や、奏法が子ども達にわかりやすく、はじめての手作り楽器に最適である。

フィルムケース・シェイカー
ラップ・シェイカー
スチロールトレイ・シェイカー
スチロールトレイ・波の音(ウエイブドラム)
フィルムケース・マラカス

(注)楽器作りは「音」がポイント、どんなシンプルなものも、「音のでる遊び道具から」一歩進んで「こんな音の出る楽器」として特別な気持ちを持って作ること。「仕組み」を理解させ、好奇心を刺激する。素材の吟味、試作品を多く作り試すことを実行。仕上げには、色、形、飾りなどして楽器に対する愛着を深める。

ニ．リズム表現の第一歩 ～「音」まわしから

はじめは二人で次はみんなでつなげていくように 手拍子でまわしていく
一人目 ばん ばん ばん うん・・・ 二人目 ばん ばん ばん うん
々 ばん ばん うん うん・・・ 々 ばん ばん うん うん
々 ばん うん ばん うん・・・ 々 ばん うん ばん うん

保育における表現の問題

々 ばん ばん ばん ばん・・・ 々 ばん ばん ばん ばん

基礎的なリズム打ちを4拍 3拍 2拍 1拍 そしてランダムなリズム打ちへと広げながら、子ども自身の発想を取り入れる。足拍子、声、ことばを使って同じような活動を試みる。いきなり楽器に入ることより、このように、身体でリズムを感じると、スムーズに移行できる。方法としては惰性にならないようにすべて短めに、そして、訓練にならないようにゲーム感覚でおこなう。慣れてきたら楽器をもって楽器の音をまわすことに進めてみる。すべての音を順番に鳴らしてみると一層楽しくなる。

ホ．子どもアンサンブルから

・ことばのリズム・アンサンブル

違うことばのフレーズを2つ、3つと重ねてアンサンブルにしてみる。また、つまる音、濁音、母音の伸ばし方、抑揚など、ことばのニュアンスを強調して声に出しながら、仕上げていく。慣れてくるとことばをそのまま楽器に置き換える。楽器を用いる場合、そのことばのイメージで音を決め、材質、音質、高低など重ならないように配慮する。

もも なし ぶどう すいか さくらんぼ かき はっさくさくさく
♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪ ♪♪ ♪ ♪♪ ♪♪ ♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪ ♪♪

・アンサンブルの組み立て

大事なのは、音のイメージである。アンサンブル=合奏のたのしさは、楽譜どおり間違わずに演奏することよりも、いっしょに演奏しているメンバー同士の「やりとり=コミュニケーション」を楽しむことである。そのためには次のようなことを保育者といっしょにみんなで相談するように。

- 1) テーマを決める(全体の具体的なもの)
- 2) 使う楽器の種類と数を決める(始めは2~3種類から)
- 3) メインフレーズを決める(テーマの部分を重ね合わせて)
- 4) メインサイズを決める(すぐに覚えられるような長さ4~8拍)
- 5) イントロ(はじめの合図)
- 6) エンディング(終わりの合図)
- 7) ストーリーを組み立てる(物語を考えるように)
- 8) 曲の流れを確認し各部門を調整する
- 9) 出来上がり

(注)組み立ては、なるべくシンプルに。子どもたちが今まで試してきた、リズム遊びの要素を思いださせてみる。打楽器のアンサンブルは、音のシンプルさや、微妙なニュアンス、音質を考えること。

竹 村 壽美子

リズムによる身体表現

人間が本来持っているリズム感覚は、成長するにつれ音楽に合わせて動作する快感へと高められていく。その時期が幼児期のように思う。幼児期の動きやリズムが最も大切にされなければならない時でもある。模倣の時期であり、周りの人や生き物の真似、その生活や遊び、のりもの、食物、その他動きなども、興味をもって真似ようとする。さらに聴いたことや、経験したことをイメージとして蓄え、それを再現し、その時独特の身体表現が展開される。この身体表現は、豊かなイメージを育み、表現力を高めていく土台であり、幼児期にこそ大切に育む必要がある。保育者は、子どもの動きを援助したり、動きを誘発するための工夫が大事である。そのためには、常に工夫し、自分の持っているもの、手作りのものなどを、子どもたちに注ぎ子どもたちからも、引き出していき、そんなリズム表現指導が求められる。

さまざまな感覚機能が、完全に分化されていない子どもの場合、「身体」の中に心で感じることや、身体そのものの機能が混在していると捉えることが出来る。嬉しいときに、「キャッキャッ」と言い何度も飛び跳ね、逆に思い通りに行かない時、怒りを現す時は、地団駄踏んで顔を真っ赤にして泣き叫ぶ。身体で感じ、表現するのが子ども本来の姿である。だからこそ、身体をベースに音楽を感じ、理解し、表現することを保育のなかに取り入れ、身体で感じる楽しさ、身体を揺さぶる体験をより多く体験させることが大切である。

イ．音楽ゲーム遊びの薦め

- ・子どもが楽しみながら活動できる。
- ・知らず知らずのうちに、音楽的体験ができる。
- ・知らず知らずのうちに、確かな力を身につけることができる。

より効果のあるゲーム遊びにするために

- ・ゲームと子どもを繋ぐ媒体が音や音楽であること
- ・ゲームのなかに「つけたい音楽的な力」が存在していること
- ・保育者のかかわりが明瞭であること

(例)「さんぼ」の歌で音楽ゲーム

手話で「さんぼ」の歌を引用しながら、ねらいの部分「くんだり～み・ち・・・」を意識し、その部分で相手を決めてジャンケンをする。この「くんだり～み・ち・・・」で、ジャンケンが終わるように、続いてはじめのイントロに入ることを忘れないよう繰り返す。あるく、スキップ、などのテンポは、2つの4分休符の特徴で印象を強くすることができる。

ロ．子どもの好きなライゲン遊び（輪になって踊る）

ライゲンは、「リズム遊戯」「リング・シューピール」とも呼ばれ、子どもたちがみんなで輪になり、歌やことばに合わせて、詩の内容やリズムを身体で表現する。大切なことは、みんなで丸くなって手をつなぎ動くということ。幼児にとって環境のフォルムとしては、円が最もふさわしいと言われている。円には、はじめと終わりがなくひとつに繋がっている。保育者はど

保育における表現の問題

こにいても、すべての子どもと直接かかわることができる。円には、子どもをやさしく包み、安定させる働きがある。どんなに激しく動いてもそこには、円の安らかさがある。

(例)かごめかごめ むっくりくまさん 子どもの王様 あぶくたった ロンド橋おちる

八．スキンシップを生かした表現遊び

音やリズムに合わせて、身体を脱力することや、友達とのスキンシップをたのしむ

(例)マヨネーズごっこ

2人組になり、相手の腕をマヨネーズにイメージしながら、少なくなった中身を絞り出す遊びで、腕からだんだん5本の指先まで音に合わせて搾り出していく。搾り出される子どもは、身体を脱力させてリズムに合わせて、くしゃくしゃなど自分なりの表現をする。子どもの発想で、マヨネーズが一杯詰まっている時や、すっかりなくなった時などの表現が期待できる。

(例)くらげごっこ

2人組で、ひとりはおしりに立ち、相手の脇の下に両手を入れポヨーンと上にもちあげる。脱力の気分のよさとリズムの関係、音の演出など、子どもたちと話し合いながら活動を進めていくと楽しい。持ち上げる側のやさしい表現が相まって喜んで展開できる。

二．リズムの対話表現

(例)縄まわし ボールまわし 手合わせ スカーフ・ハンカチまわし

この遊びは2人で作り出すハーモニーがたのしい。2人で組んだリズム感と気持ちを通わせ、音やメロディーに合わせて動かなければできない。リズムに合わせて交互に打つ、はずむボールを拍子とともに受けて返す、ひらひらと宙を舞う布を受けては返す。はじめはリズムにのることが困難な子もいるが、だんだんしなやかに2人の呼吸も合ってくる。少しずつ人数をふやして動きを大きくすると、ひとつのリズムと、動きに、統一されてくる。

ホ．アレンジ「音楽ごっこ遊び」

子どもは何かに変身して物語の世界へ入り込むのが大好きである。ごっこ遊びに音や音楽を登場させてみると、一層たのしく音や音楽とともにイメージの世界をひろげていくことができる。保育者は話を進めつつ即興に打楽器などを加えてみる。まわりにある楽器を何でも利用してみるといろいろな効果がある。「何かになりきって」全身で表現するこの「音楽ごっこ遊び」は、遊びのなかで没頭して「演じる」ことができ、まわりの子どもと共感し、自分の感性や個性に自信をもち自己実現に向かっていける。形の決まった身体表現と、このようなごっこ遊びから展開した表現は、子どもの生き生きさにその大きな違いを見ることが出来る。

3 表現的保育者への課題

技能中心の指導に思う

「特に音楽分野で問題になっていることとして、これらの領域の指導の状態が非常に技能中

竹 村 壽美子

心になってしまっているということ。つまり上手くなるということ。あるいは正確に出来ることが中心に考えられてしまっているということ。本来豊かさというものがこの領域では一番大事なわけである。豊かさというのは大変難しいものでその豊かさよりも、上手、下手、正確ということが中心になってしまっているということ。一方、活動のプロセスよりも結果が大事にされてきたということ、結果を発表する時の状態が重要視されていた『発表中心主義』だったともいえる。特に幼稚園保育所では、習慣になっている行事もこのひとつで、生活発表会の中核をなすのが歌であり、楽器演奏が多く親に対して評価の高いものに仕立てあげようとしてしまう。発表の結果が保育者の資質を問われるとなる。保育者は結果をよくするために、内容を選択、指導法を考えざるを得なくなり、子どもの自発性に任せておけなくなる。そこで、保育者が自分の考えている方向に指導し保育者主導型のプロセスになりがちである。」¹⁴⁾と大場も指摘している。

日ごろの遊びや生活から生み出す、そんな、子どものものの発表会になるような保育を、ぜひ展開させてほしいと切に願う。「きちんと、そろえて、かっこうよく」という技能的な練習に陥らないように。子どもが本来もっている豊かな表現力を発揮するように導く人であってほしい。幸い保育現場において、このようなことを検討する機会や、研修会が行われていることも増えてきているようで、保育者の意識も変わりつつあると聞き、期待するところである。

鼓笛バンドについて

もうひとつこれに類する問題をもっているのが、子どもの鼓笛バンドである。大人の感覚で幼い子どもたちに、全員服装からそっくりにそろえて、個性を抑え、パレードする。楽器を持つ役割も子どもの気持ちがどこまでくみ取られているのかと気になる。年に一回か二回の大会のようにも見えるが、その練習風景ときたら本当に過酷な状態で、心底楽しんでいる子どもがどれだけいるのだろうかと思わしい。はじめは歩く練習、そして楽器を持ったままで弾かずに、吹かずに、歩く練習。そして最後は重い楽器を身につけて延々と練習する。こうなるともう子ども一人ひとりの表現というのは無視されているようで、集団もしくは団体の表現になっている。子どもにとっては忍耐力だけが要求されている。もっと楽器に興味をもち、楽しめるはずの楽器との出会いがここに大きく影響してしまっている。どのような楽器にも作る人の魂が入っていて、その魂が音を響かせていると私は信じている。練習が済めば倉庫に無造作に積み上げてある楽器を見て空しく、また子どもに申し訳ないと思わないのだろうか。このようにして出来上がった鼓笛バンドをみて、「感激です」と涙を流している保護者がいる。そしてまた保育者は次回奮闘するのだろうか。やっぱり表現の原点を振り返らなくてはいけないのではないかと思う。

倉橋惣三の誘導保育と「表現活動：音楽」

倉橋の思想のなかで、「誘導保育法」には独自性が出ている。倉橋は誘導保育法について、i「幼児の生活」 ii「自己充実」 iii「充実指導」 iv「誘導」 v「教導」と表現している。

保育における表現の問題

この保育方法の特徴を「生活を生活で教育することに他ならず、教育法でありながら、多分に生活的である」と述べている。「つきつめると誘導という方法は、幼児の側の生活があるところへ、保育者は寄り添いながら保育者の意図のほうへ引き寄せる方法といえる。生活を、生活で、生活に、ということばには、その間に教育を寄せ付けていないように聞こえるが、目的の方から言えばどこまでも教育である。ただ教育としてもっている目的を、対象にはその生活のままさせておいて、そこへもちかけていきたい心を言っているのである。教育へ生活を持ってくるのは楽なことである。それは、然るべき教育仕組みをこしらえておいて、そこへ子どもを入れればよいわけである。しかし、子どもが真にさながらで、生きて動いているところの生活をそのままにしておいてそこへ教育を順応させていくことは容易ではない。しかしこれが本当ではないか……略」また「表現活動において、子どもの自発性に委ねているだけでは、創造的なものへとうまく変化していくとは限らない。大人が行き過ぎない程度で、保育者の意図のほうへ誘うことも大切なときがある。子どもの表現活動が一層楽しく音や音楽とともに、イメージの世界をひろげていくとき、保育者は、子どもの心や気持ちをよく理解して、その流れをきちんと保ちながら、子どもの気持ちを損なうことなく、その雰囲気づくりや、動きの手助けをしたり、即座に音楽を提供しながら、子どもの表現をともに楽しむことだ」と言い、「幼児生活のなかで今までたどってきた生活 自己充実 充実指導 誘導、そしてその後に教導が出てくる。この時の『この子にもうひとつ、これをつけ加えてやりたい』というところに行われるのが教導である。」¹⁵⁾この教導の、ほんのちょっとが「表現活動：音楽」に最もふさわしい保育ではないかと、倉橋の思想を理解したい。

おわりに

『表現活動：音楽』を手がかりに、保育における表現の問題を明らかにしていく時、そこにいる保育者が大きく影響していることに、あらためて気づかされた。子どもは、遊びを通して自己実現に向かっている。子どもは、遊ぶことで自己実現を果たそうとする。遊びのなかでなりたい自分になっていく。それは「生きる力」の小さな積み重ねではないだろうか。子どもの「表現」とは、「生きる力」そのものの現われである。子どもは遊びの展開のなかで、他者とともによりよくいきようとする「生きる力」＝「表現」技法を身につけていく。それが領域「表現」の役割であり、その成否はそこにかかわる保育者なしでは語ることはできない。

引用文献

- 1) 大場牧夫『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』萌明書林 1996 P1
- 2) 同書 P31
- 3) 津守真『子どもの世界をどうみるか』NHKブックス 1987 P14
- 4) 大場牧夫『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』萌明書林 1996 P151
- 5) 同書 P150
- 6) 同書 P153

竹 村 壽美子

- 7) 同書 P137
- 8) 黒川健一「過程における豊かさを大切に」森上史朗編『幼児保育の招待』ミネルヴァ書房 1998
P105
- 9) 森上史郎、高杉自子、柴崎正行『幼稚園教育要領解説』フレーベル館 1995 P152
- 10) 同書 P153
- 11) 吉良創『シュタイナー教育の音と音楽』学研 2002 P62
- 12) 二階堂邦子『手遊びの歌』学事出版 1991 P6
- 13) 桜田素子『ワクワク音あそび・リズムあそび』黎明書房 2003 P11
- 14) 大場牧夫『表現原論 幼児の「あrawし」と領域「表現」』萌明書林 1996 P148~149
- 15) 倉橋惣三『倉橋惣三選集第一集』フレーベル館 1992~1996 P24~47

参考文献

- 1) 花原幹夫『保育内容 表現』北大路書房 2005
- 2) 杉山浩之 守屋淳編著『個が育ちあう授業をつくる』ミネルヴァ書房 2003
- 3) 藤善端子 田村春子 三木孝子 小林美津子教書『動きの表現』不味堂
- 4) 日名子太郎『保育学概説』学芸図書 2003
- 5) 佐伯胖『幼児教育へのいざない』東京大学出版会 2001
- 6) 倉橋惣三『倉橋惣三の保育者論』フレーベル館 1998
- 7) 奈良市教育委員会『やまとのわらべうた』1999
- 8) 佐伯胖『学びを問いつづけて』小学館 2003
- 9) 岡田正章『保育原理』英堂 1998
- 10) 黒川健一、小林美実編『保育内容「表現」』建帛社 1998

その他の参考資料(参照)

幼稚園教育要領(抄)表現

1 ねらい

いろいろなものの美しさなどに対する豊かな感性をもつ。

感じたことや考えたことを自分なりに表現して楽しむ。

生活の中でイメージを豊かにし、様々な表現を楽しむ。

2 内容

生活の中で様々な音、色、形、手触り、動きなどに気づいたり、楽しんだりする。

生活の中で美しいものや心を動かす出来事に触れ、イメージを豊かにする。

様々な出来事の中で感動したことを伝え合う楽しさを味わう。

感じたこと、考えたことなどを音や動きなどで表現したり、自由にかいたり、つくったりする。

いろいろな素材に親しみ、工夫して遊ぶ。

音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりする楽しさを味わう。

描いたり、つくったりすることを楽しみ、遊びに使ったり、飾ったりする。

自分のイメージを動きや言葉などで表現したり、演じて遊んだりする楽しさを味わう

保育における表現の問題

保育所保育指針（抄）表現

3 歳児の保育の内容

身の回りの様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づく。

音楽に親しみ、聞いたり、歌ったり、体を動かしたり、簡単なリズム楽器を鳴らしたりして楽しむ。

様々な素材や用具を使って、好きなように描いたり、扱ったり、形を作ったりして遊ぶ。

動物や乗り物などの動きを模倣して、体で表現する。

絵本や童話などに親しみ、興味を持ったことを保育士と一緒に言ったり、歌ったり様々に表現して遊ぶ。

4 歳児の保育の内容

様々なものの音、色、形、手ざわり、動きなどに気づき、驚いたり感動したりする。

友だちと一緒に音楽を聴いたり、歌ったり、体を動かしたり、楽器を鳴らしたりして楽しむ。

感じたこと、思ったことや想像したことなどを様々な素材や用具を使って自由に描いたり、作ったりすることを楽しむ。

童話、絵本、視聴覚教材などを見たり、聞いたりしてイメージを広げ、描いたり、作ったり様々に表現して遊ぶ。

作ったものを用いて遊んだり、保育士や友だちと一緒に身の回りを美しく飾って楽しむ。

身近な生活経験をごっこ遊びに取り入れて遊ぶ楽しさを味わう。

5 歳児の保育の内容

様々な音、色、形、手ざわり、動きなどを周りのものの中で気づいたり見つけたりして楽しむ。

音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色の美しさやリズムの楽しさを味わう。

様々な素材や用具を利用して描いたり、作ったりすることを工夫して楽しむ。

身近な生活に使う簡単なものや様々な遊びに使うものを工夫して作る。

友だちと一緒に描いたり、作ったりすることや身の回りを美しく飾ることを楽しむ。

自分の想像したものを体の動きや言葉で表現したり、興味を持った話や出来事を演じたりして楽しむ。

6 歳児の保育の内容

様々な音、色、形、手ざわり、動きなどに気づき、感動したこと、発見したことなどを創造的に表現する。

音楽に親しみ、みんなと一緒に聴いたり、歌ったり、踊ったり、楽器を弾いたりして、音色やリズムの楽しさを味わう。

様々な素材や用具を適切に使い経験したり、想像したことを、創造的に描いたり、作ったりする。

身近な生活に使う簡単な物や、様々な遊びに使うものを工夫して作って楽しむ。

協力し合って、友達と一緒に描いたり、作ったりすることを楽しむ。

感じたこと、想像したことを、言葉や体、音楽、造形などで自由な方法で、様々な表現を楽しむ。

自分や友達表現したものを互いに聞かせ合ったり、見せ合ったりして楽しむ。

間近にある美しいものを見て身の回りを美しくしようとする気持ちを持つ。